

126. 真野寺 木造不動明王立像および二童子像 修復事業

真野寺 執行長 伊藤 尚徳

<修復前>



不動明王立像（2尺像）
〈像高（立脚地付 - 頂蓮）65.9

不動明王立像（3尺像）
および二童子像

〈不動明王立像（3尺像）〉
像高（立脚地付 - 頂蓮）86.5
〈衿羯羅童子立像〉
像高（地付 - 頭頂）47.6
〈制陀迦童子立像〉
像高（地付 - 頭頂）48.5
（二童子立像修復前写真撮影：
東京藝術大学美術学部藝術学科日本・
東洋美術史研究室）

千葉県



解説

本修復対象は、神仏分離などの影響により客仏として真野寺に安置されていた像である。事業開始前までは不動明王像1軀（像高約60cm）と二童子像の修復計画であったが、開始直前の当寺における文化財調査により別置保存の不動明王像（像高約90cm弱。顔と手足が失われていた。）との関連性が見出され計4軀（不動明王像2軀および二童子像）の修復事業となった。修復の結果、周辺作例との類似性から鎌倉時代後期の制作とみられることが明らかとなった。加えて像の背面に遺された近世の修理銘や同様の銘文がある台座が適切に保存処置できたことは当地の歴史資料保存としても重要な成果といえる。詳細は修復事業報告書を参照。

<修復後>



不動明王立像



不動明王立像および二童子像

修復業者

彫刻制作・文化財修復 たまや

修復内容

信仰対象としての像容回復のため、像高2尺の不動明王立像は、当初の像容を阻害していた後補塗膜を除去し、構造的強化を図ったのち岩座や框座などを新補して自立するよう処置を施した。像高約3尺の不動明王立像は欠失・亡失している面部・両腕部・両脚先および足柄の復元を行い、当初部とみられる岩座への安定的自立を図った。なお修復後は当初一具であった3尺の不動明王立像および二童子像を同一框上（新補）に設置した。本像の伝来および修理銘がある框座は、底面から墨書を確認できるように新補框座へ内部格納する仕様とした。

真野寺不動明王立像 2 軀 および二童子像修復事業報告書

【はじめに】

修復対象である不動明王立像（2 尺像）と二童子像は、鴨川市高蔵神社大山寺不動堂不動明王及び二童子像（県指定）と腰位置の低い体つきや簡潔な条帛の衣文表現などに類似が認められ、13 世紀末から 14 世紀にかけての制作と判断される。

修復直前の調査において木造框座裏面に、天明 8 年（1788）に不動三尊像を「本地堂宮殿」より明王院に移し、寛政 2 年（1790）に修理した不動三尊像であることを記す墨書修理銘が確認された（明王院は、明治初年まで本像が伝来した寺院）。さらに別置されていた 3 尺の不動明王立像（面部、両腕、両足先を欠損）の本体背面に同様の修理銘が確認された。両銘記の発見により、修復開始時には、この 3 尺像を加えた計 4 軀の修復事業となった。

修復の結果、修理対象 4 軀のうち、3 尺像と二童子像がほんらい一具像であったことが確認され、本修復に伴う科学的調査により、4 軀の材料がいずれもカヤであると樹種同定された。本修復の成果は、真野寺を含む南房総地域における中世～近世を繋ぐ彫刻文化財の資料保存としても意義があるものと思われる。

【修復対象の名称】 真野寺不動明王立像 2 軀 および二童子像

【員数】 4 軀

【指定の有無】 未指定

【制作年代】 13 世紀末～14 世紀頃

【安置場所】 真野寺本堂（千葉県南房総市久保 587）

【期間】 令和 5 年 4 月～令和 8 年 5 月

【監修】 松田誠一郎（東京藝術大学美術学部藝術学科教授）※修復指導・框座墨書翻刻

【修復者】 鈴木篤（彫刻制作・文化財修復たまや代表）※修復・本稿執筆

鈴木祥子（彫刻制作・文化財修復たまや）※修復・作図

【協力】 鈴木伸哉（昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科准教授）※樹種同定

【法量】（cm）

〈不動明王立像（以下 2 尺像）〉

像高（立脚地付-頂蓮）65.9 髪際高 60.0 面長（髪際 - 顎下）7.2 耳張 9.3 面奥 10.3

体幹部幅（肩口）11.6 裾張 20.2 肘張（修復後）27.2 腹奥 13.1

左足柄 長 4.5 幅 4.7 厚 1.5 右足柄 長 4.6 幅 4.9 厚 1.5

新補岩座 高 10.5 幅 30.5 奥 29.5

新補框座 厚 6.6 幅 47.1 奥 39

新補光背 長（柄含む）102.5 幅 37.5 厚 2.4

〈不動明王立像（以下 3 尺像）〉

像高（立脚地付-頂蓮）86.5 髪際高（修復後）79.3 面長（修復後）9.6 耳張 11.5
面奥（修復後）13.2 体幹部幅（肩口）15.6 裾張 26.9 肘張（修復後）35.5 腹奥 17.8
左足柄（修復後）長 6.3 幅 6 厚 2.9 右足柄（修復後）6.7 幅 7.2 厚 2.9
岩座高（修復前）14.0 岩座幅 36.8 岩座奥（修復前）34.8
寛政期墨書在銘框座 厚 3.3 幅 96.4 奥 40.4
新補框座 厚 10 幅 106.5 奥 64.3
新補光背 長（柄含む）130.6 幅 48.5 厚 4（補材含む）

〈衿羯羅童子立像〉

像高（地付-頭頂）47.6 髪際高 44.8 面長 6.2 耳張 7.5 面奥（修復後）8.4
最大幅（腰 - 裳裾）17.9 腹奥 10.4
岩座高 10.3 岩座幅 28.5 岩座奥（修復後）24.6

〈制吒迦童子立像〉

像高（地付-頭頂）48.5 髪際高（修復後）46.5 面長（修復後）7.5 耳張 7.5 面奥（修復後）8.8
最大幅（左肘 - 右手先）22.0 腹奥 10.5
岩座高 9.4 岩座幅 29.5 岩座奥 24.5

【形状】

〈2 尺像〉

巻髪、頂蓮をあらわす。左耳前に辯髪をあらわした痕跡がある。後頭部の巻髪をやや伸ばす。髪際上方に花冠をあらわす。額に水波相をあらわす。耳朵環状不貫通。天地眼、牙上下出。三道をあらわす。条帛を左肩にかける。左腕を体側に垂下し、持物（絹索か）を執る。右腕を屈臂して肘をやや外に張り、持物を執る。裾、腰布をつけ、腰をやや右に捻り、左脚をわずかに遊ばせて立つ。

〈3 尺像〉

復元した面部（玉眼以外）、両腕部、両足先は 2 尺像に準じる。
巻髪、頂蓮をあらわす。後頭部の巻髪をやや伸ばす。耳朵環状不貫通。条帛を左肩にかける。裾、腰布をつけ、腰を右に捻り、左脚をやや斜め前方に遊ばせて立つ。

〈衿羯羅童子立像〉

蓬髪、両肩に髪を垂らす。顔をやや斜め右上に仰ぐ。条帛を左肩にかける。両腕を胸前で合掌する。腰布、裾をつけ、腰をわずかに左へ捻り岩座の上に立つ。

〈制吒迦童子立像〉

巻髪、額から頭頂を丸くあらわす。顔をやや斜め左上に仰ぐ。肩衣をつける。左腕を胸前で屈臂し、肩衣の端を左手で握る。右腕を体側に垂下してわずかに後方へ振り、持物（棍棒か）を執る。腰を左に捻り、左脚を少し踏み出して岩座の上に立つ。

【品質構造】

〈2尺像〉

(本体) 一木造 (カヤ)、彫眼、彩色。

頭体幹部は、頂蓮から足柄までを縦1材より彫成する。木芯は体幹部材の中央に込める。内削りなし。左腕を肩口から手先まで1材で彫り出して角柄で繋ぐ。右腕を肩と角柄で繋ぎ、臂を芋付けでそれぞれ別材を矧ぐ。各矧ぎ目に銅釘、鉄釘を打ち込む。表面は白下地、彩色。なお、材料の樹種については、【樹種同定】の項を参照 (以下同じ)。

〈3尺像〉一木造 (カヤ)、彩色。

頭体幹部は、頂蓮から足首までを縦1材より彫成する。顎下から両耳前を通る位置で、面部をマスク状に割離して内削りする (玉眼嵌入のためか)。体幹部に内削りなし。

(岩座) 木造。カヤ。横1材から彫出する。

(框座) 木造。広葉樹 (クスノキか)、1材製。黒漆塗。

〈衿羯羅童子立像〉

(本体) 一木造 (カヤ)、玉眼、彩色・漆箔。

木表を正面に向けて木取りされる。内削りなし。条帛に漆箔を施す。

(岩座) 木造 (カヤ)。横1材から彫出する。

〈制吒迦童子立像〉一木造 (カヤ)、玉眼、彩色・漆箔。

木表を正面に向けて木取りされる。内削りなし。肩衣に漆箔を施す。面部をマスク状に割離して、玉眼を嵌入 (面割痕と思われる亀裂がある)。

(岩座) 木造。カヤ。横1材から彫出する。

【保存状態】

〈2尺像〉

台座を亡失し、自立ができない。像全体が後補彩色層 (漆) に厚く覆われて剥落が進行し、当初部の造形を阻害している。左後頭部および右前頭部にウロがある。右腕が肩口から脱落する。左手先に虫蝕が見られる。左足先の第3・4・5指、右足先1指欠失。

〈3尺像〉

両足先 (足柄を含む) を脛から踝にかけて折損し、岩座の上に自立ができない。像全体が後補彩色層に覆われる。面部、両腕部、亡失。両足先を脛半ばから欠失。各所に摩損、虫蝕、剥落が見られる。

後補彩色層 (漆) に覆われ一部剥落する。腰布および裳の背面側に漆で書かれた寛政2年の修理銘がある。※【3尺像背面修理銘】の項参照。

岩座は3基とも一部欠失、虫喰あり。框座にも随所に虫喰がみられる。なお框座上面にこれらの岩座が載っていたとみられる痕跡があり、裏面に来歴を記した寛政2年の修理墨書がある。※【框座墨書】の項参照。

〈衿羯羅童子立像〉

像全体が後補彩色層 (漆) に厚く覆われる。鼻先、合掌する第2・3・4・5指の先端、左足

第1指の先端を欠失する。腰布、裙の端に鼠害がある。左下脛、左足先に虫穴がある。

〈制吒迦童子立像〉

像全体が後補彩色層（漆）に厚く覆われる。面相部は額から顎の上にかけての虫蝕による損壊が著しく、玉眼嵌入部が露出している。

両足先および両足柄が虫蝕による損壊が著しく倒壊寸前である。

【修復方針】

2尺像は後補塗膜を除去して解体し、像容の回復と構造の安定を図る。他3軀は、比較的堅牢な修理銘のある塗膜を維持しつつ本来一具であった像容の回復を図るため、框を新調して同一台座の上に設置する。併せて寛政期修理墨書のある框座の保存を図る。なお3尺像の欠失・亡失箇所は、作風が近似する2尺像を基準に復元する。

【修復内容】

〈2尺像〉

クリーニング後、鉄釘の錆によって劣化した左腕矧ぎ目の解体を行った。次に後補塗膜層を除去した。過去の修理で傷んでいた木質部（紙貼りの喰い付きをよくするためと思われる刻み込み）には、メチルセルロース水溶液1%を塗布した後、アクリル樹脂（パラロイドB72）をアセトンで2%前後の濃度にしたものを濡れ色にならないよう複数回に分けて塗布し強化した。虫穴には、ブタノールで溶解したブチラール樹脂をフェノールマイクロバルーンおよび顔料を混合して色合わせし、充填した。見苦しい箇所や大きく欠損していた箇所、頭部のウロには適宜木屎漆を充填した。両腕部の各矧ぎ目を整理した後にエポキシ系接着剤（ボンドEセット）を用いて組上げ、釘穴痕を利用して真鍮釘で補強した。なお打ち込まれていた銅釘は腐食していないため現状のままとした。左足先の指および辮髪、巻髪の一部、持物、光背、岩座、框を新補した（光背参考作例：浄瑠璃寺不動三尊像 ほか）。

〈3尺像〉

精製水とエタノールの混合液を用いてクリーニングを行った。メチルセルロース水溶液を塗布したのち、アクリル樹脂（プライマルAC）水溶液で剥落止めを行った。虫蝕などで脆弱となった木質部には、他像と同様にアクリル樹脂（パラロイドB72）やブチラール樹脂、木屎漆を用いて処置した。

亡失・欠失した面部、両腕部、両脚部は、2尺像を基準として、13～14世紀周辺作例（世田谷観音寺不動明王立像、東大寺法華堂所在不動明王坐像ほか）も参考としてヒノキ材で復元し、水晶製の玉眼を嵌入した。面部と両腕部はエポキシ系接着剤（ボンドEセット）と麦漆を併用して接着した。なお過去に数回折損している両脚部は強度の関係上カヤ材を用いエポキシ系接着剤で接着後にステンレス製の細ビスを各1本ずつ用いて補強した。足柄で当初の岩座に復位した。加えて今後の地震等を考慮し、新補光背と新補両肩を銅製のアオリ止めを作成し繋いで岩座の光背柄に復位した。持物新補。

〈衿羯羅童子立像〉

3尺像と同様にクリーニング後、メチルセルロース水溶液を塗布したのち、虫蝕などで脆弱

となった木質部にアクリル樹脂（パラロイド B72）をアセトンで低濃度に溶解したものを複数回塗布し強化した。虫穴にはブチラール樹脂を他と同様に充填した。欠損していた鼻先と指先は、木屎漆で塑形したのち現状に色を合わせるためアクリル絵具で補彩した。粉状化していた後補彩色も現状との調和を図るため一部補彩した。持物新補。

〈制吒迦童子立像〉

おおむね衿羯羅童子立像に準じる。虫蝕で大きく欠損していた面部や足先は、13～14 世紀周辺作例を参考に復元した（参考作例：鴨川市高倉神社大山寺不動堂制吒迦童子立像、世田谷観音寺制吒迦童子立像、保寧寺旧蔵制吒迦童子立像ほか）。持物新補。

〈岩座・框座〉

当初の岩座 3 基は、彩色層の粉状化が著しかったため、メチルセルローズ水溶液とアクリル樹脂（プライマル AC）水溶液を混交したものを塗布し定着と保存を図った。虫穴にはブチラール樹脂を他と同様に充填した。各岩座の欠失部を新補し、既存の釘穴を利用して新補の框とケヤキの丸柄で繋ぎ、さらに底面に薄材を挟み安定を図った。

寛政期の修理墨書がある框座は、他像と同様にメチルセルローズを塗布後、アクリル樹脂（パラロイド B72）を塗布し強化した。虫蝕の多い木口面のみブチラール樹脂を他と同様に充填した。最後に新補框裏に墨書を判読できるよう格納し保存した。

【所見】

不動明王立像のうち 2 尺像と 3 尺像は、矧ぎ目に見られる木屎漆や麦漆の性質や時代の違いがあることから、制作当初から少なくとも 2 回以上修理が施されたことがわかる。

2 尺像の後補塗膜の下からは、素地彩色（白下地に赤色顔料）が僅かに確認された。

3 尺像は、体幹部には内割りはないが、面割りされた後頭部側に内割りがあり、これは玉眼を嵌入するための仕事とみられる。このことから、一具像である二童子像の玉眼嵌入も当初の構造と推定される。ただし、制吒迦童子立像の玉眼の内側に当てられた和紙などは後補のものともみられる。

塗膜の状況や、3 尺像の本体背面に記された寛政期の修理銘などを保存する方針を考慮して、二童子像のいずれの玉眼も解体せず、現状のままとした。

2 尺像については、後補の塗膜除去後に当初の様相が鮮明となった。その作風は、細身な体幹や球体状に腹部の量感を捉える点、Y 字状に鎬を立てる特徴的な衣文線の表現などが、3 尺像を中尊とする不動三尊像と近似している。特に 2 尺像と 3 尺像については、耳や巻髪の形状に類似が認められ、両像の当初部における各部分の寸法は、1:1.3 前後の均等な比率を示す。加えて科学的な調査の結果、4 軀の体幹部および当初の岩座 3 基の材料がいずれもカヤ材であったが判明している。これらのことから、4 像の作者は、同一工房に属する仏師であった可能性が考えられる。

【主な参考文献】

丸尾彰三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代 造像銘記篇 第 1-8 卷（中央公論美術出版、1966-1971 年）。

丸尾彰三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代 重要作品篇 第 1-5 卷（中央公論美術出版、1973-1997 年）。

水野敬三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代 造像銘記篇 第 1-16 卷（中央公論美術出版、2003-2020 年）。

『大和古寺大観』第 7 卷 海住山寺 岩船寺 浄瑠璃寺（岩波書店、1978 年）。

『奈良六大寺大観』補訂版 第 11 卷 東大寺 3（岩波書店、2000 年）。

中野玄三「不動明王像」（『日本の美術』238）至文堂、1986 年。

阪田宗彦「密教法具」（『日本の美術』282）至文堂、1989 年。

鴨川市教育委員会編『千葉県指定有形文化財木造不応明王坐像及び両脇侍立像保存修理報告書』宗教法人高蔵神社、1996 年。

『教王護国寺所蔵 国宝（美術工芸品）木造講堂諸尊二十軀修理報告書』教王護国寺、2000 年。

『仏像半島－房総の美しき仏たち』千葉市美術館、2013 年。

【修復前写真】

2尺像



【修復前写真】 3尺像および岩座と框座（上面）



3尺像左右側面写真撮影：
東京藝術大学美術学部藝術学科
日本・東洋美術史研究室
※令和5年7月25日
真野寺本堂における3尺像
発見時の調査写真

【修復前写真】 衿羯羅童子立像



【修復前写真】 制吒迦童子立像



【作業写真】①クリーニング、②錆釘除去（2 尺像のみ）、③後補塗膜除去（2 尺像のみ）、
④含浸強化、⑤虫穴埋め、⑥剥落止め

①（衿羯羅童子立像）



②（2 尺像）



③（2 尺像）



④（制吒迦童子立像）



⑤（制吒迦童子立像）



⑥（3 尺像）



【作業写真】⑦・⑧木屎漆による虫蝕部の充填・塑形、⑨・⑩欠失・亡失・光背・岩座の新補、
⑪古色・補彩、⑫・⑬台座・光背の連結、⑭寛政期墨書在銘框座の新補框座への格納

⑦（制吒迦童子立像）



⑧（制吒迦童子立像）



⑪（3尺像）



⑬（3尺像）



⑨（2尺像）



⑩（3尺像）



⑫（衿羯羅童子立像岩座）



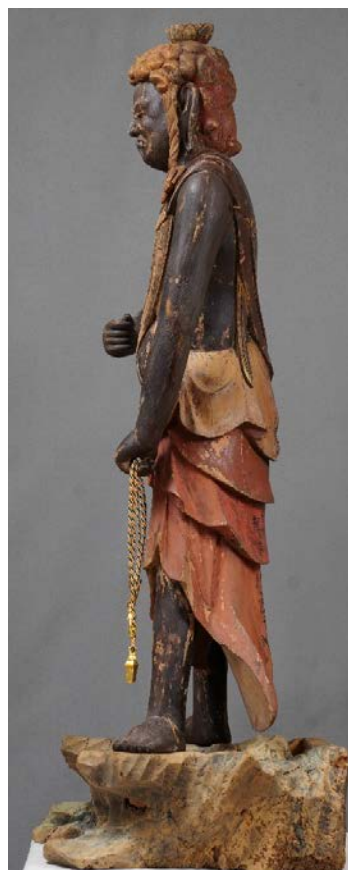
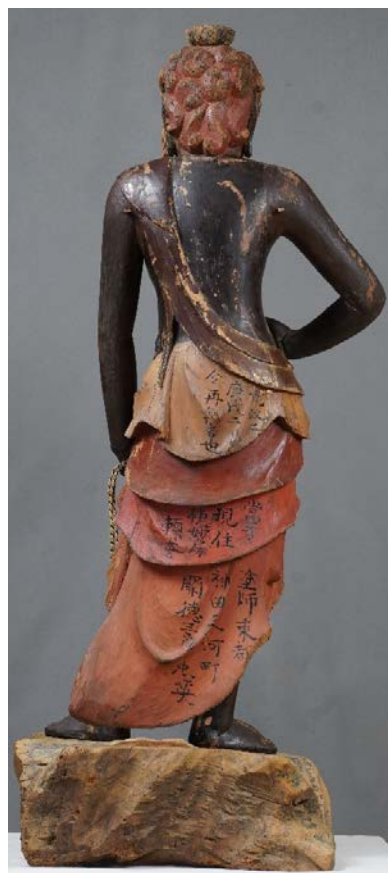
⑭（3尺像および二童子像框座）



【修復後写真】 2尺像



【修復後写真】 3尺像



【修復後写真】 衿羯羅童子立像



【修復後写真】制吒迦童子立像



【修復後写真】 2尺像完成組上げ写真



【修復後写真】 3尺像および二童子像完成組上げ写真



【3尺像背面修理銘】※修復後写真拡大図 撮影：たまや

寛政二
庚戌二月
令再興者也

當寺
現住
便妙房
頼誉

塗師東都
神田三河町
關德三郎忠英



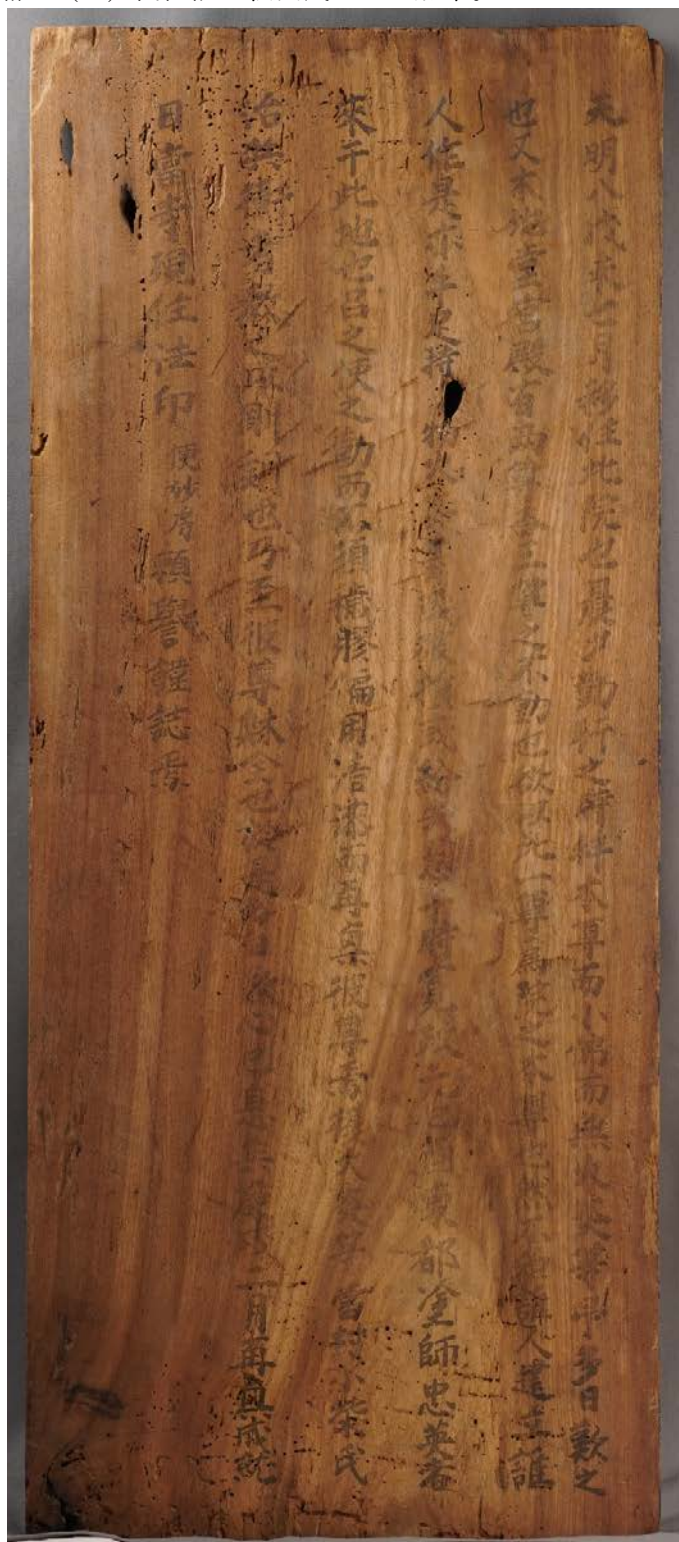
【框座墨書】

寛政期墨書在銘の框座 保存処置後写真（右 撮影：たまや）

翻刻（左）は、松田誠一郎氏（東京藝術大学美術学部藝術学科教授）による。

□は未読文字、[] 内は原文注記、句読点と（ ）内注記は松田氏による加筆。

天明八戊未（ママ、戊申）七月移住此院也。晨夕勤行之時、拜本尊而小佛而無火災等、予多日歎之也。又本地堂宮殿有兩尊。各三尊之不動也。欲以此一尊爲院之本尊也。然不知誰人建立、誰人作。是亦手足持物火災等消滅破損、或紛失急。于時寛政元己酉、東都塗師忠英者來于此地也。召之使之勤而不須穢膠、偏用清漆而再興彼尊焉。復火災等、當村小紫氏治兵衛者□（教？）之以彫刻也。乃至彼尊躰全也。於是多日歎心已息矣。庚戌（寛政二年）二月再興成就日、當寺現住法印「便妙房」頼誉謹誌焉。



【樹種同定】

真野寺不動明王像・二童子像の樹種

鈴木伸哉（昭和女子大学）

はじめに

真野寺不動明王像・二童子像の修理に伴い、これらの部材に用いられた木材の樹種を同定した結果について報告する。

資料と方法

樹種同定は木材切片のプレパラート観察によりおこなった。それぞれの像の部材の剥落片から片刃カミソリによって木材の横断面・接線断面・放射断面の切片を採取し、これをガムクロラルで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートには TUASC057-063 の標本番号を付した。

結果

プレパラート観察の結果、いずれの木材もカヤに同定された。以下に木材解剖学的な記載と標本の顕微鏡写真を示し、同定の根拠を明らかにする。

カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科（写真: TUASC57-59,62-63）

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は少ない。仮道管の内壁には 2~3 本ずつ走るらせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で、1 分野に 2~3 個。

考察

真野寺不動明王像（二尺像・三尺像）および矜羯羅童子、制吒迦童子像、それぞれの岩座にはカヤが用いられていた。カヤの木材は黄白色で緻密、かつやや重硬で加工が容易であり、耐朽・保存性が高く、古くから彫刻材に用いられてきた。仏像の用材としてはヒノキとともに好適である。

TUASC	像	部位	樹種
57	2 尺不動	両肩	カヤ
58	3 尺不動	頭部	カヤ
59	3 尺不動	岩座	カヤ
60	矜羯羅童子	岩座	カヤ
61	制吒迦童子	岩座	カヤ
62	矜羯羅童子	右足	カヤ
63	制吒迦童子	右足	カヤ

真野寺不動明王像・矜羯羅童子・制吒迦童子立像 各岩座の部材の顕微鏡写真
(撮影：鈴木伸哉)

1：不動明王像（二尺像）両肩の柄穴内部（頭体幹部）（TUASC57），

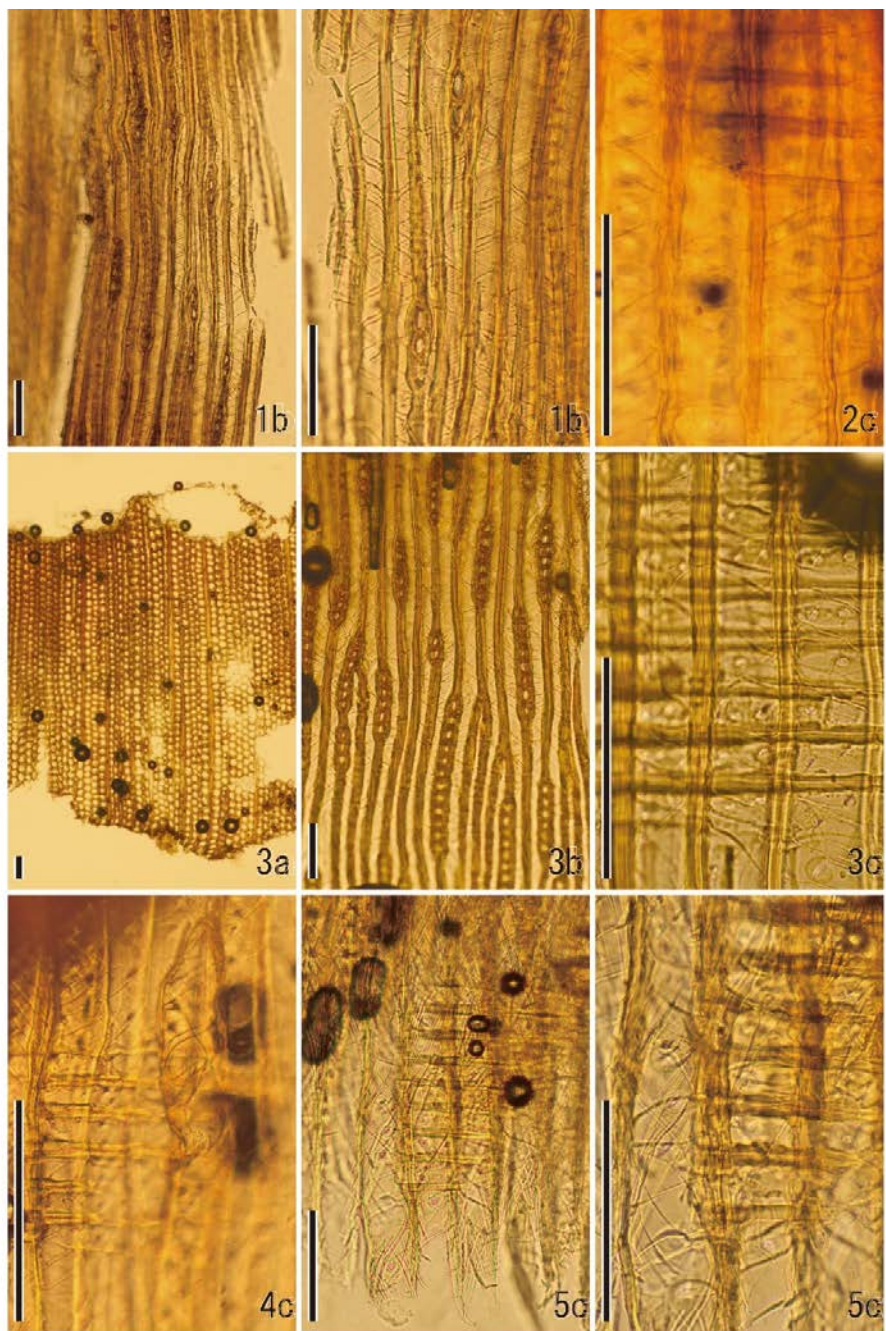
2：不動明王像（三尺像） 後頭部内削り面（TUASC58），

3：不動明王像（三尺像） 岩座足柄穴内部（TUASC59），

4：矜羯羅童子像 右足柄（TUASC62），

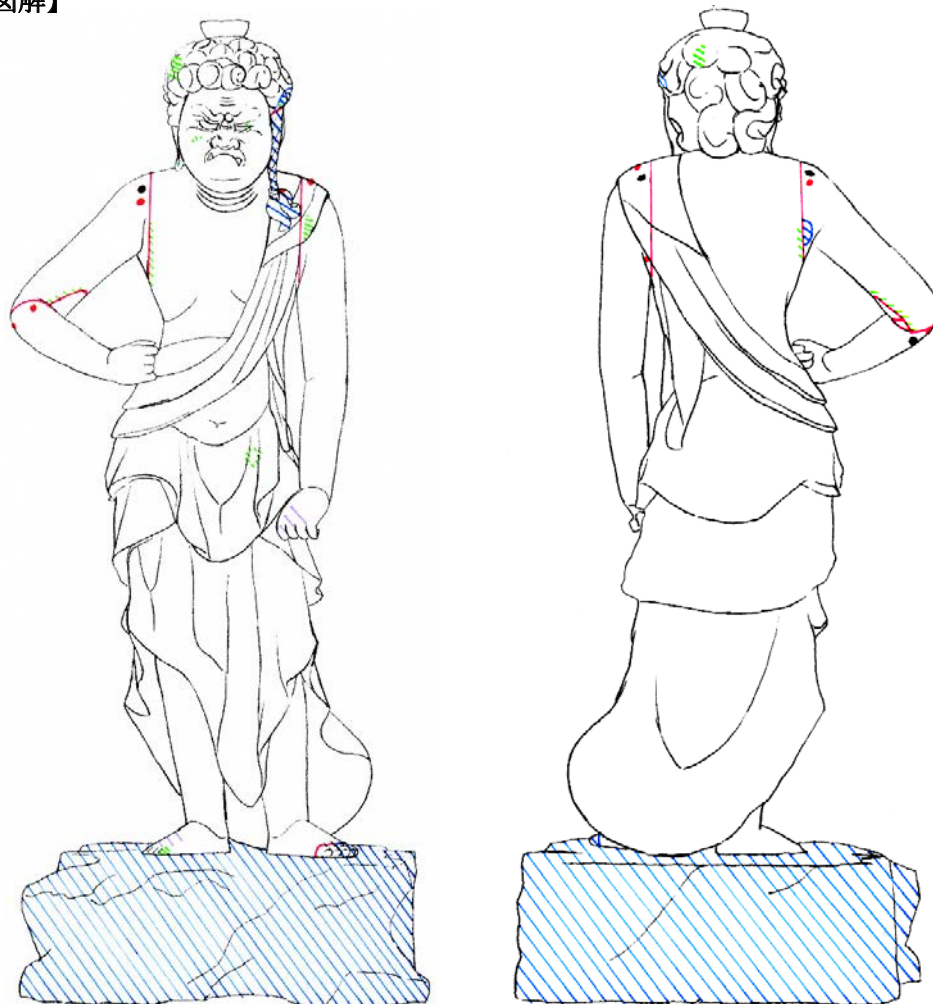
5：制吒迦童子像 右足柄（TUASC63），

a：横断面, b：接線断面, c：放射断面. Scale：100 μ m.



【修復箇所図解】

2尺像



新補箇所



木屎漆による補修箇所



虫穴充填箇所



補彩箇所



矧ぎ目



真鍮釘



ステンレス製細ビス



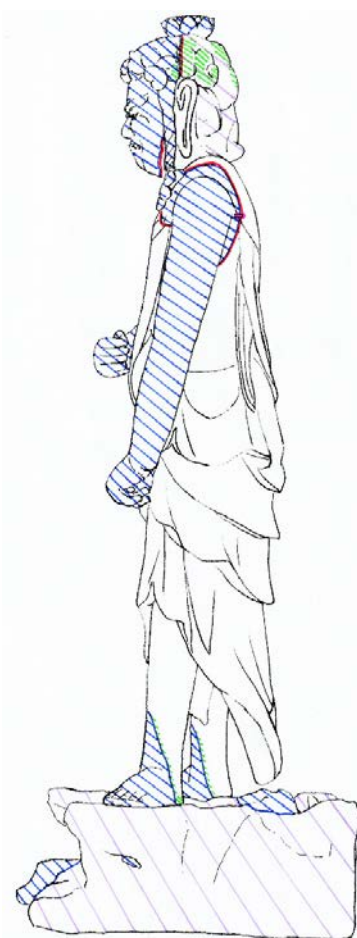
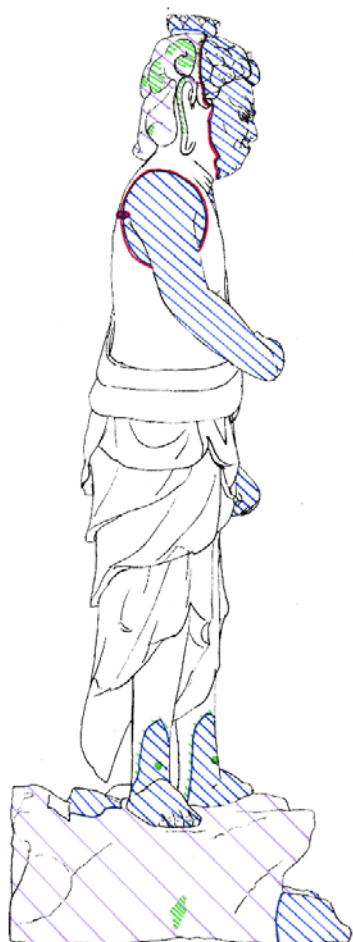
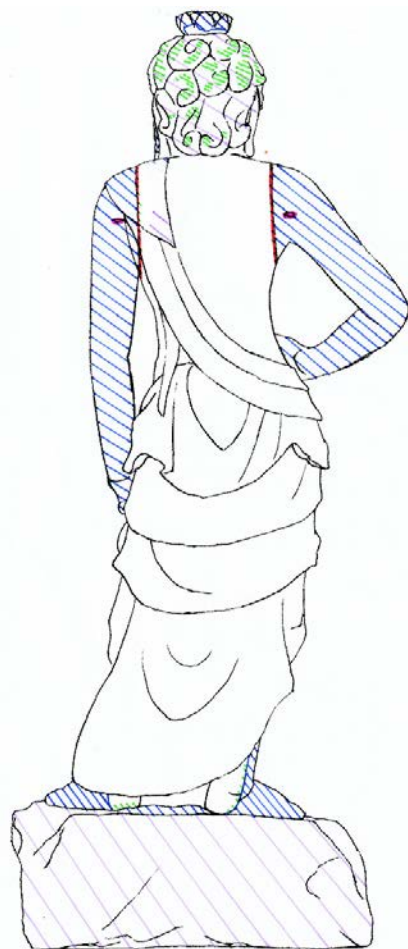
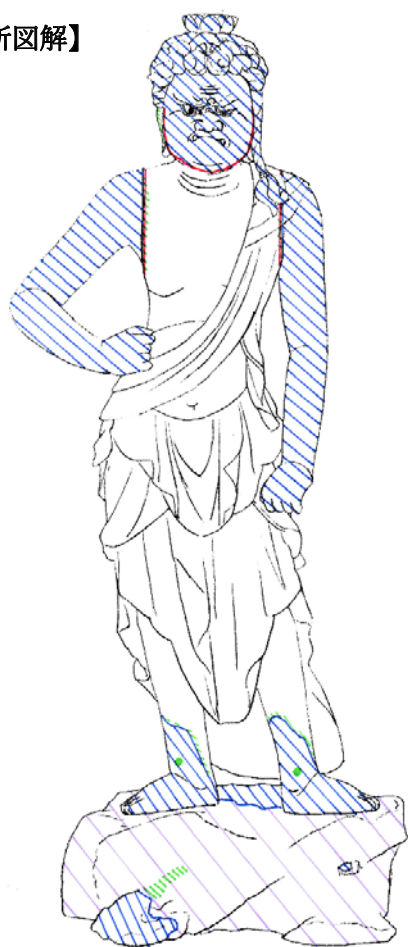
新補の銅製金具



既存の銅釘

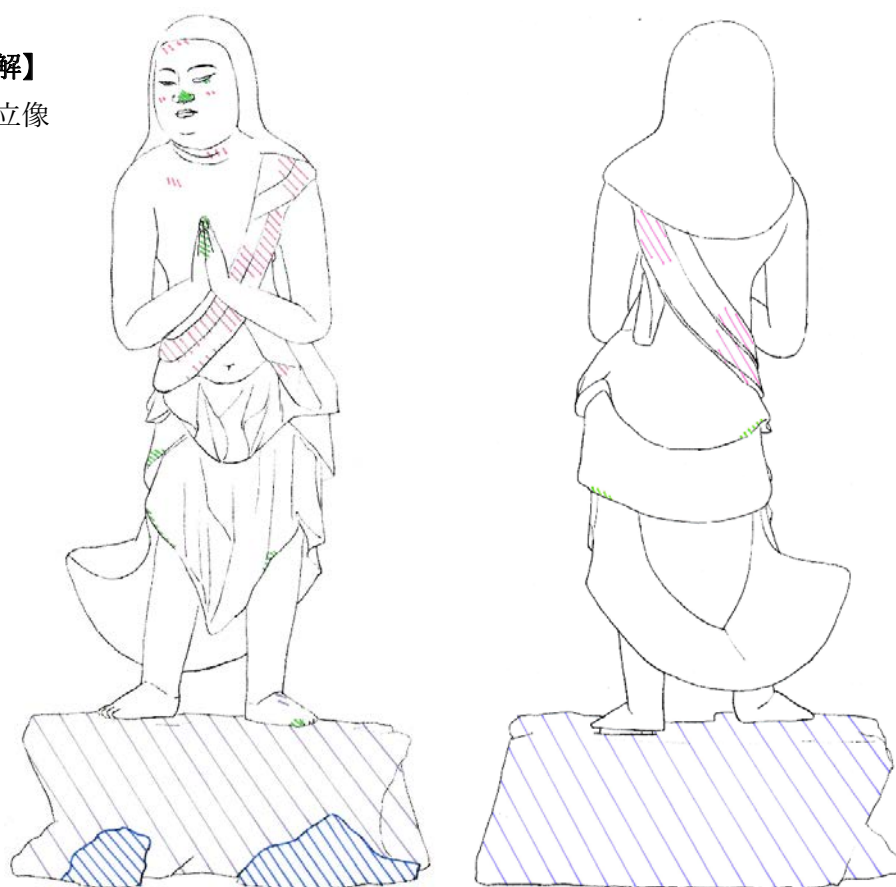
【修復箇所図解】

3尺像



【修復箇所図解】

矜羯羅童子立像



制吒迦童子立像

